

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2005-80614

(P2005-80614A)

(43) 公開日 平成17年3月31日(2005.3.31)

(51) Int.Cl.⁷
A01K 93/00F I
A O I K 93/00Z
テーマコード (参考)
2 B 1 O 7

審査請求 未請求 請求項の数 8 O L (全 13 頁)

(21) 出願番号 特願2003-318954 (P2003-318954)
(22) 出願日 平成15年9月10日 (2003. 9. 10)(71) 出願人 000002439
株式会社シマノ
大阪府堺市老松町 3 丁 7 7 番地
(74) 代理人 100120318
弁理士 松田 朋浩
(72) 発明者 東山 貴一
大阪府堺市老松町 3 丁 7 7 番地 株式会社
シマノ内
Fターム(参考) 2B107 HA03 HA05 HA09 HA27

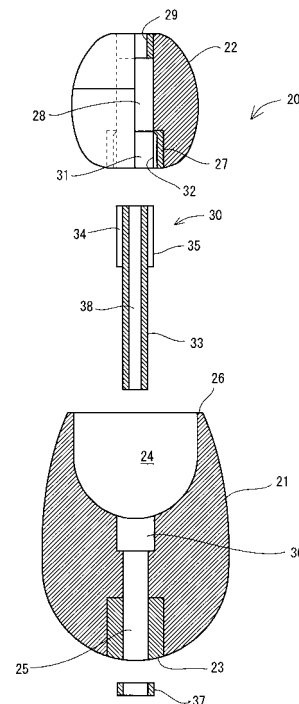
(54) 【発明の名称】 釣用浮き

(57) 【要約】

【課題】 釣人が仕掛けの態様を簡単且つ迅速に変更して海上の状況の変化に瞬時に対応することができる釣用浮きの提供。

【解決手段】 この釣用浮き 20 は、本体 21 と分離体 22 とを有する。分離体 22 は、保持機構 30 を介して本体 21 に着脱される。保持機構 30 は、保持棒 33 を備え、これに分離体 22 が螺合される。本体 21 は、貫通孔 25 が設けられ、比重が 1.035 以上に設定されている。分離体 22 は、貫通孔 28 が設けられ、比重が 1.035 以下に設定されている。本体 21 と分離体 22 が合体した状態で、上記貫通孔 25 と貫通孔 28 は、連通される。

【選択図】 図 2



【特許請求の範囲】

【請求項 1】

釣糸が挿通される第 1 釣糸挿通孔が貫通形成され、比重が 1.035 以上に設定された本体と、

釣糸が挿通される第 2 釣糸挿通孔が貫通形成され、比重が 1.035 以下に設定された分離体と、

分離体を所定の保持力で保持することによって上記第 1 釣糸挿通孔の中心と第 2 釣糸挿通孔の中心とを一致させた状態で当該分離体を本体に合体させる保持機構とを備えた釣用浮き。

【請求項 2】

10

上記保持機構は、

本体に立設された保持棒と、

分離体に設けられ、保持棒と螺合する螺合凹部とを有する釣用浮き。

【請求項 3】

上記保持棒は、先端部外周面に雄ねじが形成され且つ上記第 1 釣糸挿通孔を構成する筒状部材からなり、

上記螺合凹部は、上記第 2 釣糸挿通孔に形成されたねじ孔からなる請求項 2 に記載の釣用浮き。

【請求項 4】

20

上記保持機構は、

本体に立設され、先端部が略球形に形成された保持棒と、

分離体に設けられ、保持棒の先端部と嵌合する嵌合凹部とを有し、

当該嵌合凹部は保持棒の先端部が挿脱される開口を有し、当該開口の内径寸法が上記先端部の外径寸法よりも小さく設定されている請求項 1 に記載の釣用浮き。

【請求項 5】

上記保持棒は、上記第 1 釣糸挿通孔を構成する筒状に形成され、

上記嵌合凹部は、上記第 2 釣糸挿通孔の端部の内壁面形状が略球形に形成されることによって形成されている請求項 4 に記載の釣用浮き。

【請求項 6】

上記保持棒の先端部は、外径寸法が弾性的に拡張可能なように軸方向に沿ってスリットが形成されている請求項 4 又は 5 に記載の釣用浮き。

30

【請求項 7】

上記保持機構は、

本体に設けられ、開口を有する分離体収容部と、

当該開口の周縁部から分離体収容部の内壁面に沿って形成された雌ねじ部と、

分離体の外周面に形成された雄ねじ部とを備えている請求項 1 に記載の釣用浮き。

【請求項 8】

上記保持機構は、

本体に設けられ、開口を有する分離体収容部と、

当該開口の周縁部から分離体収容部の内壁面に沿って形成された略 L 字状の係合溝と、

分離体の外周面に突設され、係合溝と係合する係合爪とを備えている請求項 1 に記載の釣用浮き。

40

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、釣りの際に使用される浮きに関するものである。

【背景技術】

【0002】

釣りのジャンルに「浮き釣り」というものがある。浮き釣りは、文字通り「浮き」と称

50

されるアイテムを用いて魚を釣ろうとするものである。図9は、一般的な浮き釣りの仕掛けによる釣りの様子を示す模式図である。

【0003】

同図が示すように浮き釣りでは、仕掛け1は、道糸2と、連結具7（通常「サルカン」と称される。）を介して道糸2に連結されたハリス3と、ハリス3の先端に設けられた釣針4と、道糸2に装着された浮き5とを有する。浮き5の装着態様は従来から種々提案されているが、この仕掛け1では、浮き5はいわゆる中通しタイプのものであって、道糸2は、浮き5の内部に挿通されており、浮き5は、道糸2に沿って自在にスライドするようになっている。ただし、一般に道糸2には浮止具8が設けられ、これにより浮き5は、サルカン7と浮止具8との間でスライドする。また、浮き5は、海中に投入された状態で所定の浮力を備え、これにより、海面6に浮かぶことになる。さらに、仕掛け1が海中で安定的に配置されるために、ハリス3には、錘9（通常「ガン玉」と称される。）が適宜装着される。

10

【0004】

このように構成された仕掛け1が海中に投入されると、釣針4、ハリス3、ガン玉9、サルカン7等に作用する重力によって釣針4等が海中に沈んでいき、道糸2が海面6に浮かんだ浮き5に対して相対的に矢印10の方向に沿ってスライドする。そして、図10が示すように、道糸2に設けられた浮止具8が浮き5に当接した時点で、当該仕掛け1が海中で安定する。

【0005】

20

ところで、海上の状況は刻々と変化し、場合によっては潮流が速くなることもある。図11は、潮流が速くなったときの仕掛け1の状態を示す模式図である。同図が示すように、潮流が速い場合は、これによって仕掛け1全体が潮流の方向（矢印11の方向）に流される。しかも、道糸2は、釣竿側に延びているから、道糸2が相対的に釣竿側に引っ張られ、その結果、仕掛け1は、海面6側に浮き上がった状態で潮流方向に流されていく。このような状態では、釣針4も海面6付近に漂う状態となるから、釣果は期待されない。

【0006】

この問題が解決されるために、図12が示すように、従来では、浮き5の浮力が抑えられ、浮き5自体が海中に潜行するように構成されたものがある。このように浮き5の浮力が抑えられた場合には、浮き5が先行しながら潮流に流されるので、仕掛け1は、浮き5に案内される状態で海中の釣人が所望する位置に配置される。ところが、このように浮き5が潜行するように構成されると、釣人から浮き5を確認することが困難となるうえ、釣人が道糸2を管理する必要があるため、この道糸管理作業は、釣人にとって熟練を要するものである。その結果、結局このような釣法では、熟練者でない限り釣果が期待されない。

30

【0007】

そこで、道糸2に浮きが2つ設けられる釣法が提案された。図13は、従来の浮きが2つ設けられた釣法（一般に「二段浮き釣法」と称される。）を模式的に示す図である。同図が示すように、道糸2には水中浮きと称される潜行浮き12と、当たり浮きと称される海面6に浮く浮き13とが装着されている（例えば、非特許文献1参照）。この場合、速い潮流が矢印11の方向に流れたときには、潜行浮き12が海中に潜行して仕掛け1を釣人の所望の位置へ運び、一方、浮き13は海面6に止まって、魚のヒットを釣人に知らせる。この釣法によれば、釣人に熟練が要請されず、釣人は、比較的簡単に釣りを行うことができる。

40

【0008】

【特許文献1】株式会社シマノ 2003 Fishing Tackle Catalogue（第217頁、第218頁）

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0009】

しかしながら、前述のように、海上の状況は刻々と変化するものであるから、このような

50

二段浮き釣法が適する状況が変化し、潮流が遅く波も小さくなり、いわゆる凪状態となる場合もある。そのような状況に変化した場合は、二段浮き釣法はむしろ適さず、図9に示された通常の釣法が適する。これに対応するために、釣人は、仕掛け全体を作り直す必要があり、この作業は非常に繁雑である。

【0010】

そこで、本発明の目的は、仕掛けの態様を簡単且つ迅速に変更し、釣人が海上の状況の変化に瞬時に対応することができる釣用浮きを提供することである。

【課題を解決するための手段】

【0011】

(1) 上記目的が達成されるため、本発明に係る釣用浮きは、釣糸が挿通される第1釣糸挿通孔が貫通形成され、比重が1.035以上に設定された本体と、釣糸が挿通される第2釣糸挿通孔が貫通形成され、比重が1.035以下に設定された分離体と、分離体を所定の保持力で保持することによって上記第1釣糸挿通孔の中心と第2釣糸挿通孔の中心とを一致させた状態で当該分離体を本体に合体させる保持機構とを備えたことを特徴とするものである。

【0012】

この構成によれば、保持機構によって分離体が本体に所定の保持力で合体される。このとき、第1釣糸挿通孔と第2釣糸挿通孔とが連通され、単一の釣糸挿通孔が形成される。すなわち、分離体が本体に合体されたときは、単一の中通し浮きが構成される。本体及び分離体が上記の比重に設定されるから、当該分離体が本体に合体された中通し浮きは、海中で所定の浮力を有する。一方、釣人は、所要時において、上記保持力に抗して分離体を引っ張ることによって分離体を本体から離脱させることができる。これにより、本体は、上記比重であることから水中浮きとして機能し、分離体は、上記比重であることから海面に浮く当たり浮きとして機能し得る。また、釣人は、さらに必要であれば、保持機構によって分離体を本体に合体させることができる。

【0013】

ここで、上記保持機構は、本体に立設された保持棒と、分離体に設けられ、保持棒と螺合する螺合凹部とを有して構成される。この構成では、本体側に設けられた保持棒に分離体がねじ込まれるだけで、分離体が簡単に本体に保持され、また、簡単に本体から分離される。

【0014】

特に、上記保持棒としては、先端部外周面に雄ねじが形成され且つ上記第1釣糸挿通孔を構成する筒状部材が採用され、上記螺合凹部は、上記第2釣糸挿通孔に形成されたねじ孔により構成され得る。この場合では、筒状部材が本体に貫通配置されることによって保持棒が形成されると同時に第1釣糸挿通孔が形成されるので、第1釣糸挿通孔を形成するための特別の加工が不要となる。しかも、第2釣糸挿通孔の一部によって、保持棒が螺合されるねじ孔が構成されるから、保持棒と螺合するための当該ねじ孔を正確に位置決めする作業が不要となる。すなわち、この第2釣糸挿通孔に上記ねじ孔が設けられることによって、当該ねじ孔の位置は、自動的に上記保持棒の位置と一致する。

【0015】

(2) また、上記保持機構は、本体に立設され、先端部が略球形に形成された保持棒と、分離体に設けられ、保持棒の先端部と嵌合する嵌合凹部とを有し、当該嵌合凹部は保持棒の先端部が挿脱される開口を有し、当該開口の内径寸法が上記先端部の外径寸法よりも小さく設定されることにより構成され得る。この構成では、本体側に設けられた保持棒が分離体の嵌合凹部に押し込まれるだけで、分離体が簡単に本体に保持され、また、分離体が保持棒から引き抜かれるだけで、簡単に本体から分離される。

【0016】

ここで、上記保持棒は、上記第1釣糸挿通孔を構成する筒状に形成され、上記嵌合凹部は、上記第2釣糸挿通孔の端部の内壁面形状が略球形に形成されることによって形成され得る。この場合では、保持棒が本体に貫通配置されることによって、当該保持棒が筒状に

形成されていることから同時に第1釣糸挿通孔が形成される。したがって、第1釣糸挿通孔を形成するための特別の加工が不要となる。しかも、第2釣糸挿通孔の一部によって嵌合凹部が構成されるから、保持棒と嵌合するために当該嵌合凹部を正確に位置決めする作業が不要となる。すなわち、この第2釣糸挿通孔に上記嵌合凹部が設けられることによって、当該嵌合凹部の位置は、自動的に上記保持棒の位置と一致する。

【0017】

特に、上記保持棒の先端部は、外径寸法が弾性的に拡張可能なように軸方向に沿ってスリットが形成されているのが好ましい。これにより、保持棒の先端部が嵌合凹部に嵌め込まれる際に、当該先端部の外径寸法は、嵌合凹部の開口の内径寸法に対応して弾性的に小さくなる。したがって、保持棒に分離体が容易に嵌め込まれるという利点がある。

10

【0018】

(3) さらに、上記保持機構は、本体に設けられ、開口を有する分離体収容部と、当該開口の周縁部から分離体収容部の内壁面に沿って形成された雌ねじ部と、分離体の外周面に形成された雄ねじ部とを備えて構成され得る。この構成では、分離体は、本体の分離体収容部に直接ねじ込まれることにより、本体に簡単に保持される。

【0019】

(4) また、上記保持機構は、本体に設けられ、開口を有する分離体収容部と、当該開口の周縁部から分離体収容部の内壁面に沿って形成された略L字状の係合溝と、分離体の外周面に突設され、係合溝と係合する係合爪とを備えて構成され得る。この構成では、分離体は、係合爪が本体の係合溝に挿入され、当該係合溝に沿ってスライドされることによって、本体に保持される。しかも、係合溝が略L字状に形成されているから、上記係合爪と係合溝との係合及び係合解除は、きわめて簡単に行われる。

20

【発明の効果】

【0020】

以上のように本発明によれば、分離体が本体に合体されることによって単一の中通し浮きが構成され、所要時には、分離体が本体から離脱されるので、釣人が単一の中通し浮きとして使用しているときであっても、分離体を本体から分離させることによって、本体を水中浮きとして使用し、分離体を当たり浮きとして使用することが可能である。したがって、釣人は、海上の状況の変化に瞬時に対応して仕掛けの態様を簡単且つ迅速に変更することができる。

30

【発明を実施するための最良の形態】

【0021】

以下、適宜図面が参照されつつ、好ましい実施形態に基づいて本発明が詳細に説明される。

【0022】

<第1の実施形態>

図1は、本発明の第1の実施形態に係る釣用浮き20の正面図であり、図2は、一部断面分解正面図である。

【0023】

この釣用浮き20は、本体21と分離体22とを有し、分離体22は、後に詳述される保持機構30を介して本体21に着脱されるようになっている。すなわち、本実施形態に係る釣用浮き20は、本体21と分離体22とが合体された状態（図1に示す状態）で単一の中通し浮きとして構成され、本体21と分離体22とが分離された状態では、本体21が水中浮きとして使用され、一方、分離体22が当たり浮きとして使用され得るものであり、本体21と分離体22とは、ワンタッチで合体又は分離がなされるようになっている。

40

【0024】

本体21は、木材、樹脂等により構成されており、外形形状が略紡錘形ないし卵形に形成されている。なお、本実施形態では、本体21が卵形に形成されているが、これに限定されるものではなく、他の種々の外形形状に形成されていてもよいことは勿論である。ま

50

た、本体 2 1 の下端部には錘 2 3 が埋設されている。この錘 2 3 は、例えば鉛等の金属により構成されており、その下端面は、本体 2 1 の外周面の一部を形成している。

【0025】

本体 2 1 には、分離体 2 2 が収容される収容部 2 4 と、収容部 2 4 に連通する貫通孔 2 5（第 1 釣糸挿通孔）とが設けられている。収容部 2 4 は、本体 2 1 の上面 2 6 から下方へ向かって形成されており、その内壁面形状は、略球形に形成されている。収容部 2 4 の仮想中心軸は、本体 2 1 の仮想中心軸と一致している。この収容部 2 4 の内径寸法は、分離体 2 2 の外形寸法に対応されており、分離体 2 2 は、図 1 が示すように、収容部 2 4 に隙間なく嵌め込まれるようになっている。

【0026】

また、貫通孔 2 5 は、釣用浮き 2 0 が中通し浮きとして使用される際に釣糸が挿通される部分であり、収容部 2 4 の底面中央部から下方に向かって設けられている。すなわち、貫通孔 2 5 は、その仮想中心軸が本体 2 1 の上記仮想中心軸と一致しており、したがって、本体 2 1 の中心を上下方向に沿って延び、且つ収容部 2 4 に連通している。なお、本実施形態では、貫通孔 2 5 の上端部 3 6 は、若干拡径されており、貫通孔 2 5 に段部が形成されている。この段部による作用効果については後述される。

【0027】

分離体 2 2 は、本体 2 1 と同様に木材、樹脂等により構成されており、外形形状は、略樽形に形成されている。なお、分離体 2 2 についても、略樽型に限定されるものではなく、他の種々の外形形状に形成されていてもよいことは勿論である。また、分離体 2 2 の下端部には錘 2 7 が埋設されている。この錘 2 7 は、本体 2 1 に設けられた錘と同様に、例えば鉛等の金属により構成されており、その下端面は、分離体 2 2 の外周面（下面）の一部を形成している。

【0028】

分離体 2 2 には、その仮想中心軸に沿って貫通孔 2 8（第 2 釣糸挿通孔）が設けられている。貫通孔 2 8 は、釣用浮き 2 0 が中通し浮きとして使用される際に釣糸が挿通される部分である。また、この貫通孔 2 8 の下端部には、螺合凹部 3 1 が設けられている。この螺合凹部 3 1 は、貫通孔 2 8 の下端部が拡径されることにより構成されており、その内周面には、雌ねじ 3 2 が形成されている。

【0029】

さらに、本実施形態では、上記貫通孔 2 8 の上端部にスリーブ 2 9 が嵌め込まれている。このスリーブ 2 9 は、円筒状に形成されており、樹脂や金属等により構成される。このスリーブ 2 9 が設けられることによって、釣糸が貫通孔 2 8 に非常に滑らかに挿通される。もっとも、このスリーブ 2 9 は、省略されてもよいことは勿論である。

【0030】

保持機構 3 0 は、保持棒 3 3 と、上記螺合凹部 3 1 とにより構成される。保持棒 3 3 は、円筒状の部材であり、樹脂や金属等により構成されている。この保持棒 3 3 の先端部 3 5 は、拡径されており、当該先端部 3 5 に雄ねじ 3 4 が形成されている。この雄ねじ 3 4 は、上記螺合凹部 3 1 に設けられた雌ねじ 3 2 と螺合するようになっている。保持棒 3 3 の外径寸法は、本体 2 1 に設けられた貫通孔 2 5 の内径寸法に対応されており、したがって、保持棒 3 3 は、上記貫通孔 2 5 に隙間なく挿入される。このように、保持棒 3 3 が貫通孔 2 5 に挿入されることにより、保持棒 3 3 が円筒状に形成されていることから、保持棒 3 3 の軸方向に沿って形成される孔 3 8 は、上記釣糸が挿通される部分を構成することになる。

【0031】

このとき、貫通孔 2 5 の上端部 3 6 が前述のように拡径されることにより段部が形成されているが、この上端部 3 6 の内径寸法は、保持棒 3 3 の先端部 3 5 の外径寸法に対応されている。したがって、保持棒 3 3 が上記貫通孔 2 5 に上方から挿通された状態では、保持棒 3 3 の先端部 3 5 が上記貫通孔 2 5 の上端部 3 6 によって形成される段部に当接する。なお、本実施形態では、保持棒 3 3 の下端部に固定リング 3 7 が設けられている。この

10

20

30

40

50

固定リング 37 は、樹脂や金属等からなる環状の部材であって、その内径寸法は保持棒 33 の外径寸法に対応され、その外径寸法は、上記貫通孔 25 の内径寸法よりも大きくなるように設定されている。そして、保持棒 33 が上方から上記貫通孔 25 に挿通され、当該保持棒 33 の下端部に固定リング 37 が固定されることによって、本体 21 に立設された状態となる。すなわち、保持棒 33 は、本体 21 の中心を貫通した状態で配置され、上記収容部 24 に突出する。

【0032】

このように本体 21 に錘 23、保持棒 33 及び固定リング 37 が設けられることによって、本体 21 の比重は、1.035 以上に設定される。具体的には、本体 21 の比重は、1.03～1.15 の範囲で設定され、好ましくは、1.035～1.05 の範囲で設定され得る。また、分離体 22 は、上記錘 27 及びスリーブ 29 が設けられることによって、比重が 1.035 以下に設定される。具体的には、分離体 22 の比重は、0.75～1.035 の範囲で設定され、好ましくは、0.85～1.035 の範囲で設定され得る。

【0033】

分離体 22 は、前述のように本体 21 の上記収容部 24 に嵌め込まれるものであるが、このとき分離体 22 の螺合凹部 31 に保持棒 33 が螺合される。つまり、分離体 22 は、収容部 24 に嵌め込まれる際に、保持棒 33 の先端部にねじ込まれる。これにより、分離体 22 が本体 21 に保持固定されると共に、保持棒 33 の孔 38 の中心と分離体 22 の貫通孔 25 の中心とが一致され、釣用浮き 20 の中心を上下方向（軸方向）に沿って貫通する単一の釣糸挿通孔 39（図 1 参照）が形成される。

【0034】

このように本実施形態に係る釣用浮き 20 では、保持機構 30 によって分離体 22 が本体 21 と合体される。この状態では、本体 21 の貫通孔 25 と分離体 22 の貫通孔 28 とが連通され、単一の釣糸挿通孔 39（図 1 参照）が形成される。すなわち、図 3 が示すように、分離体 22 が本体 21 に合体されて釣用浮き 20 が構成される。このとき、本体 21 及び分離体 22 の比重が前述のように設定されるから、当該釣用浮き 20 は、海中で所定の浮力を有する中通し浮きとして構成され、通常海面 L に浮かぶ浮きとして使用される。

【0035】

一方、図 4 が示すように、釣人は、所要時（例えば潮流が速い場合等）においては、分離体 22 を本体 21 から離脱させることによって、釣用浮き 20 をいわゆる二段浮きとして使用することができ、本体 21 を水中浮きとして使用し、分離体 22 を当たり浮きとして使用することができる。さらに、釣人は、必要であれば、再び分離体 22 を本体 21 に合体させて釣用浮き 20 を単一の中通し浮きとして使用することができる。

【0036】

よって、本実施形態に係る釣用浮き 20 では、釣人の所望時に単一の中通し浮きとして使用することもでき、また二段浮きとして使用することもできるので、釣人は、海上の状況の変化に瞬時に対応して仕掛けの態様を簡単且つ迅速に変更することができる。

【0037】

特に、本実施形態では、上記保持機構 30 が本体 21 側に設けられた保持棒 33 と、分離体 22 側に設けられた螺合凹部 31 とにより構成されるので（図 2 参照）、釣人は、分離体 22 を本体 21 にねじ込むという簡単な作業により、両者を合体させることができると共に、同様の作業によって、両者を簡単に分離することができる。したがって、釣人は、海上の状況の変化に一層迅速に対応して仕掛けの態様を変更することができる。

【0038】

さらに、本実施形態では、筒状の保持棒 33 が本体 21 に貫通配置されることによって当該保持棒 33 が本体 21 に立設されると共に、釣糸が挿通される貫通孔 28 が構成される。したがって、分離体 22 を保持固定するために保持棒 33 が別途設けられたとしても、特別に釣糸が挿通される孔の加工が不要であるという利点がある。

【0039】

<第2の実施形態>

次に、本発明の第2の実施形態について説明される。

図5は、本発明の第2の実施形態に係る釣用浮き40の分解断面図である。

【0040】

本実施形態に係る釣用浮き40が上記第1の実施形態に係る釣用浮き20と異なるところは、上記釣用浮き20では、保持機構30は、雄ねじ34が形成された保持棒33と、分離体22に設けられた螺合凹部31とにより構成されていたのに対し、本実施形態に係る釣用浮き40では、保持機構41は、先端部42が略球形に形成された保持棒43と、分離体22に設けられた嵌合凹部44とにより構成されている点である。つまり、保持棒43の先端部42に分離体22が嵌め込まれることによって、本体21と分離体22とが合体されるようになっている。なお、その他の構成については、上記第1の実施形態に係る釣用浮き20と同様である。 10

【0041】

図6は、保持棒43の拡大斜視図である。

同図が示すように、保持棒43の先端部42は、外径が滑らかなに拡大されており、これにより略球形に形成されている。なお、上記第1の実施形態に係る保持棒33と同様に、保持棒43は筒状に形成され、軸方向に沿って孔38が設けられている。また、この先端部42には、スリット45、46が形成されている。これらスリット45、46は、互いに直交して十字状に形成されており、これにより、当該先端部42の外径寸法は、弾性的に拡張が可能となっている。 20

【0042】

また、嵌合凹部44は、分離体22の貫通孔28の下端部に設けられており、その内壁面形状は、略球形に形成されている。この嵌合凹部44は、分離体22の下面47に開口48を有し、上記保持棒43の先端部42は、この開口48から嵌合凹部44に嵌め込まれるようになっている。

【0043】

本実施形態においても、保持棒43は、本体21の貫通孔25に上方から挿通され、固定リング37が装着されることによって本体21に立設される。このとき、保持棒43の先端部42は、收容部24内に突出する。釣人は、分離体22を收容部24に挿入し、保持棒43の先端部42を分離体22の嵌合凹部44に嵌め込むだけで、分離体22は、一定の保持力で本体21に固定される。また、釣人は、当該保持力に抗して分離体22を引っ張ることによって、分離体22を本体21から分離させることができる。したがって、釣用浮き40は、上記第1の実施形態に係る釣用浮き20と同様に、単一の中通し浮きとして使用することもでき、所要時には、分離体22を本体21から簡単に切り離して二段浮きとして使用することができる。 30

【0044】

特に、本実施形態では、保持棒43の先端部42にスリット45、46が設けられているから、保持棒43が上記嵌合凹部44に嵌合する際には、保持棒43の先端部42が弾性的に縮径される。したがって、分離体22は、きわめて簡単に保持棒43と嵌合する。そして、分離体22の先端部42が嵌合凹部44内に嵌め込まれると、保持棒43の先端部が弾性的に拡張され、分離体22は、本体21側に一定の保持力で確実に保持される。なお、釣人は、再び分離体22を本体21から分離する場合には、分離体22を引っ張る作業を行うが、このとき、上記保持棒43の先端部42が弾性的に縮径されるので、分離体22を分離する作業も容易である。 40

【0045】

<第3の実施形態>

次に、本発明の第3の実施形態について説明される。

図7は、本発明の第3の実施形態に係る釣用浮き50の分解断面図である。

【0046】

本実施形態に係る釣用浮き50が上記第1の実施形態に係る釣用浮き20と異なるところ 50

ろは、保持機構 5 1 の構造であって、上記釣用浮き 2 0 では、保持棒 3 3 を介して分離体 2 2 が本体 2 1 に合体されていたのに対し、本実施形態に係る釣用浮き 5 0 では、分離体 2 2 が直接本体 2 1 にねじ込まれることによって両者が合体されるようになっている点である。なお、その他の構成については、上記第 1 の実施形態に係る釣用浮き 2 0 と同様であるが、特に本実施形態に係る釣用浮き 5 0 では、本体 2 1 の貫通孔 2 5 は真直に形成され、この貫通孔 2 5 にスリーブ 5 2 が装着されており、一方、分離体 2 2 の貫通孔 2 8 にもスリーブ 5 3 が装着されている。各スリーブ 5 2、5 3 が設けられることによって、釣糸は、スムーズに各貫通孔 2 5、2 8 に挿通される。

【0047】

本体 2 1 の収容部 2 4 の内壁面には、雌ねじ 5 4 が形成されている。一方、分離体 2 2 の周面には、雄ねじ 5 5 が形成されている。釣人は、分離体 2 2 を把持し、雄ねじ 5 5 と本体 2 1 の雌ねじ 5 4 とを螺合させることによって、本体 2 1 と分離体 2 2 とを合体させることができる。このように、本実施形態では、分離体 2 2 が直接本体 2 1 にねじ込まれるから、本体 2 1 に対する分離体 2 2 の着脱作業がきわめて簡単であり、釣用浮き 5 0 は、単一の中通し浮きとしても、二段浮きとしてもより使い勝手の良いものとなる。

【0048】

<第 4 の実施形態>

次に、本発明の第 4 の実施形態について説明される。

図 8 は、本発明の第 4 の実施形態に係る釣用浮き 6 0 の分解断面図である。

【0049】

本実施形態に係る釣用浮き 6 0 が上記第 1 の実施形態に係る釣用浮き 2 0 と異なるところは、保持機構 6 1 の構造であって、上記釣用浮き 2 0 では、保持棒 3 3 を介して分離体 2 2 が本体 2 1 に合体されていたのに対し、本実施形態に係る釣用浮き 6 0 では、分離体 2 2 に形成された係合爪 6 2 が本体 2 1 に設けられた係合溝 6 3 に嵌め込まれることによって両者が合体されるようになっている点である。なお、その他の構成については、上記第 1 の実施形態に係る釣用浮き 2 0 と同様であるが、特に本実施形態に係る釣用浮き 6 0 では、上記第 3 の実施形態に係る釣用浮き 5 0 と同様に、本体 2 1 の貫通孔 2 5 は真直に形成され、この貫通孔 2 5 にスリーブ 5 2 が装着されており、一方、分離体 2 2 の貫通孔 2 8 にもスリーブ 5 3 が装着されている。

【0050】

分離体 2 2 に設けられた係合爪 6 2 は、略円柱状に形成され、分離体 2 2 の周面から外側に向かって突設されている。係合爪 6 2 は、本実施形態では、分離体 2 2 の周面に周方向に対象に 4 カ所に設けられている。もっとも、係合爪 6 2 は、周方向に対象に 2 カ所に設けられていてもよいし、さらに多数設けられていてもよい。

【0051】

上記係合溝 6 3 は、略 L 字状に形成されている。具体的には、係合溝 6 3 は、本体 2 1 の上面 2 6 から収容部 2 4 の内壁面に沿って下方へ延び、その後収容部 2 4 の内壁面に沿って周方向に延びている。係合溝 6 3 の溝幅寸法は、上記係合爪 6 2 の外径寸法に対応されており、係合爪 6 2 は、係合溝 6 3 に隙間なく嵌め込まれるようになっている。したがって、係合爪 6 2 は、この係合溝 6 3 に挿入され、当該係合溝 6 3 に沿ってスライドされることによって、分離体 2 2 が本体 2 1 に係合保持される。なお、上記係合爪 6 2 及び係合溝 6 3 の形状は、上記の形状に限定されるものではなく、両者が隙間なく係合するために互いに同様の形状に形成されていればよい。

【0052】

本実施形態では、釣人は、分離体 2 2 を把持して係合爪 6 2 を本体 2 1 の係合溝 6 3 に嵌め込み、当該係合溝 6 3 に沿って分離体 2 2 をスライドさせるだけで、簡単に分離体 2 2 を本体 2 1 に固定することができ、また、分離体 2 2 を本体 2 1 から取り外すことができる。このとき、係合爪 6 2 の外形寸法及び係合溝 6 3 の内形寸法が適当に設定されることによって、両者間に所定の摩擦力が生じ、これにより、分離体 2 2 が本体 2 1 に合体した状態で、釣人の意図しないときに両者が分離してしまうことが防止される。このように

、本実施形態に係る釣用浮き 60 においても、単一の中通し浮きとしても、二段浮きとしてもより使い勝手の良いものとなる。

【産業上の利用可能性】

【0053】

本発明は、釣り、特に海での浮き釣りに使用される浮きに適用され得る。

【図面の簡単な説明】

【0054】

【図1】図1は、本発明の第1の実施形態に係る釣用浮きの正面図である。

【図2】図2は、本発明の第1の実施形態に係る釣用浮きの一部断面分解正面図である。

【図3】図3は、本発明の第1の実施形態に係る釣用浮きの使用状態を示す模式図である 10

。

【図4】図4は、本発明の第1の実施形態に係る釣用浮きの他の使用状態を示す模式図である。

【図5】図5は、本発明の第2の実施形態に係る釣用浮きの分解断面図である。

【図6】図6は、本発明の第2の実施形態に係る釣用浮きの保持棒の拡大斜視図である。

【図7】図7は、本発明の第3の実施形態に係る釣用浮きの分解断面図である。

【図8】図8は、本発明の第4の実施形態に係る釣用浮きの分解断面図である。

【図9】図9は、一般的な浮き釣りの仕掛けによる釣りの様子を示す模式図である。

【図10】図10は、一般的な浮き釣りの仕掛けが海中で安定した状態を示す模式図である。 20

【図11】図11は、潮流が速くなったときの仕掛けの状態を示す模式図である。

【図12】図12は、浮力が抑制された浮きが使用された仕掛けの状態を示す模式図である。

【図13】図13は、従来の二段浮き釣法による仕掛けの状態を模式的に示す図である。

【符号の説明】

【0055】

20・・・釣用浮き

21・・・本体

22・・・分離体

23・・・錘 30

24・・・収容部

25・・・貫通孔

27・・・錘

28・・・貫通孔

30・・・保持機構

31・・・螺合凹部

32・・・雌ねじ

33・・・保持棒

34・・・雄ねじ

38・・・孔 40

39・・・釣糸挿通孔

40・・・釣用浮き

41・・・保持機構

42・・・先端部

43・・・保持棒

44・・・嵌合凹部

45・・・スリット

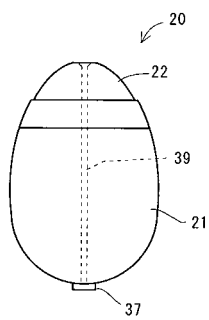
46・・・スリット

47・・・下面

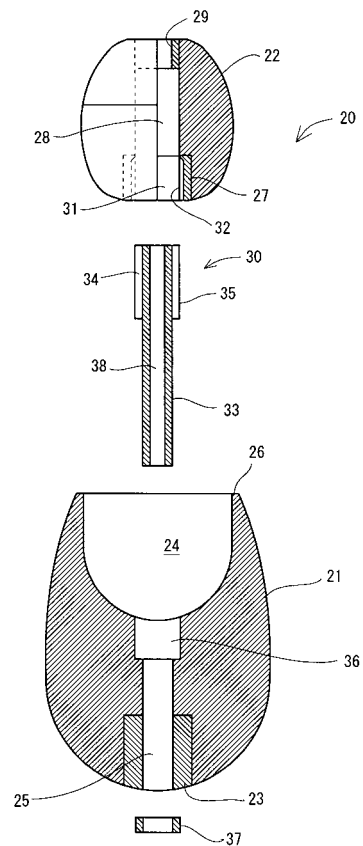
48・・・開口 50

- 50・・・釣用浮き
- 51・・・保持機構
- 52・・・スリーブ
- 53・・・スリーブ
- 54・・・雌ねじ
- 55・・・雄ねじ
- 60・・・釣用浮き
- 61・・・保持機構
- 62・・・係合爪
- 63・・・係合溝

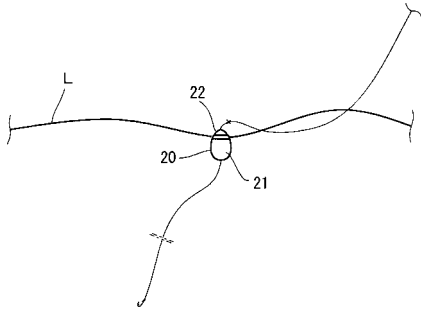
【図 1】



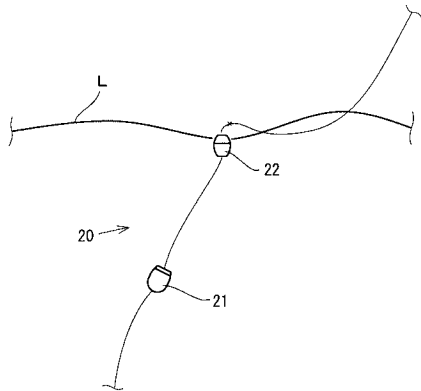
【図 2】



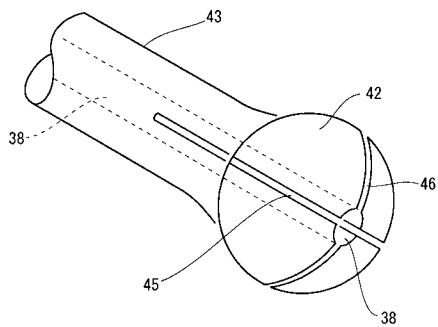
【図 3】



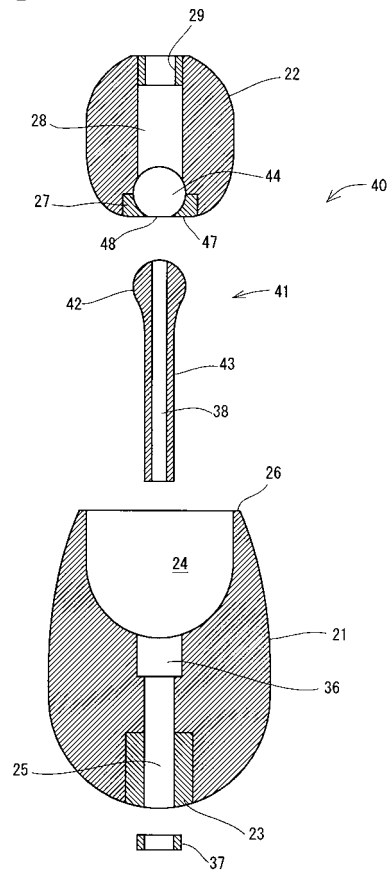
【図 4】



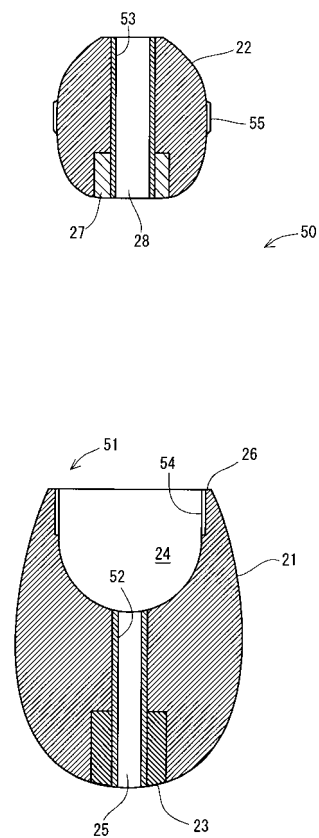
【図 6】



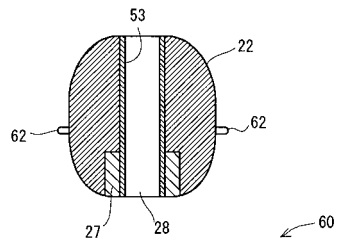
【図 5】



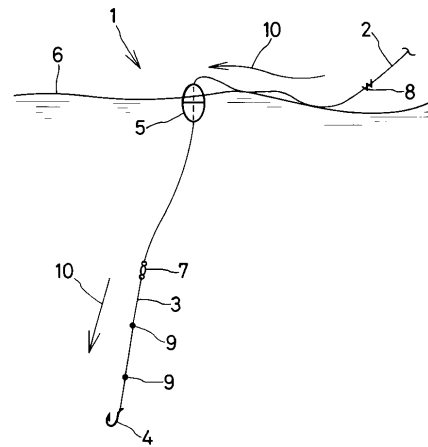
【図 7】



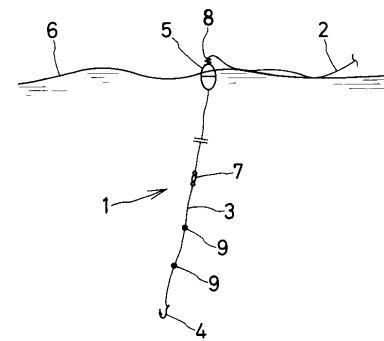
【図 8】



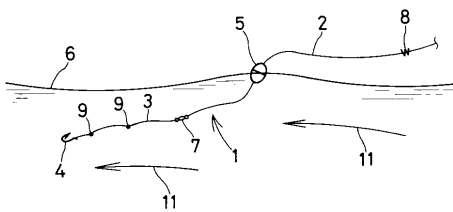
【図 9】



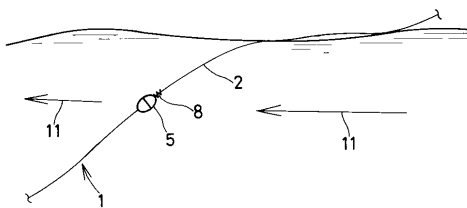
【図 10】



【図 11】



【図 12】



【図 13】

